

キャリア研究をはじめの一構成概念の定義

前は「問題と目的の吟味」について書きましたが、今回は「構成概念の定義」について書きたいと思います。私はこれまで、主に質問紙による調査を実施してきました。若松先生が「質問紙は、できたものを見ると誰でも作れそうに思えますが、厳密にあれこれ配慮して作成すると、けっこうな時間がかかります。」と書かれているように、そう簡単なものではありませんでした。調査を実施してから、「こういうことを聞いたかったわけではない」や「理解が異なっている？」と思うこともありました。本調査を実施する前にプレテストを行って教示文や項目の見直しを行うのですが、「そう捉えられるのか」「そういう考え方もあるのか」と本当に難しいなあ毎回思うのです。

昨年から複数のメンバーで取り組んでいるテーマがあるのですが、その中で構成概念を定義することは重要だと改めて感じています。特に、何気なく使っている用語ほど、難しさを感じます。みなさんは、「地元」をどのように定義するでしょうか？

生まれ育った場所が同じであれば、「地元＝出身地」となることが多いと思います。では、親の転勤などで転校を何回か繰り返した人はどこを地元と考えるのか？ また、調査対象者が成人期以降になると、生まれ育った地域よりも進学や新しい家族を持つなどして、長く生活している地域の方が「地元」という感覚になる、などその人の生活歴や考え方が影響してくることに気づきます。この点については、共同研究者間で繰り返し議論しました。

対象者個々の捉え方で良しとするのか、研究目的を考慮したうえで明確に定義し質問紙にも明記するのか。ここでは「地元」を例に書いていますが、研究者が取り扱おうとしている「地元」の概念と、対象者がとらえる「地元」の概念は異なる可能性があります。キーワードとなる用語であれば、ここを明確にしないまま質問紙を作成して調査を実施しても、研究者が期待する回答が得られず、あとの祭りとなってしまう危険性があります。インタビュー調査では、相手の反応を見ながら質問を言い換えたり、より詳しい内容を尋ねることができるでしょう。しかし、質問紙調査では多くの場合、対象者に配布された後は相手の解釈にゆだねられます（集合調査をしても、回答者から質問が出ることはほとんどありません）。

いかに質の高い回答を得るかは、質問紙の作成にかかっています。その第一歩として、何を測定しようとしているのかを明確化し、必要であれば構成概念を定義することは不可欠なことだと思います。自分では「こう考えるのが当然だ」と思っていることでも、対象者、他分野の研究者、もしかすると同分野の研究者でも異なっている場合があります。研究計画書に取り組むときにはこのことを念頭に置き、様々な人の意見も得ながらブラッシュアップしていきたいものです。

(岩手保健医療大学 竹本由香里)